

ワイルドとキーツ

岩永弘人
(東京農業大学助教授)

ワイルドは「英国のルネッサンス」の中でキーツについて次のように述べている。「そのヴィジョンの静謐さと明解さにおいて、その完璧な自己抑制において、その過つ事のない美の感覚、その境界線のはっきりした想像力の領域の意識において、キーツは純粋で清澄な芸術家であり、ラファエロ前派の先駆者であり、それ故私が言おうとしている偉大なロマン主義運動の先駆者でもある。」ここからワイルドがキーツを自分の芸術活動の指標にしていたという事が読み取れるが、同時に彼はキーツを1人の人間としても見ている。その辺の事を、「キーツのラブレターがオークションで売られる日」を取りあげて考察してみたい。この詩が書かれたのは1885年3月1日で、この日の前日サザビーでキーツの恋人ファニー・ブローンへの手紙が売られた。

これはエンディミオンが書いた手紙、／ひそかに、距離をおいて愛した女性にあてて。
／それなのに今、競売場の騒がしい奴らは、／そのあわれに汚れた手紙をたたき売り、値段をつける。
／ああ、情熱の脈拍の1つ1つに対して、／売人が値段をつけるのだ。思うに、あいつらは芸術を愛してはいない。
／その小さな病んだ眼でじっと見つめ、ほくそえむために、／詩人の心のクリスタルを砕いてしまうような奴らは。

こう伝えられているのではないのか？／遠い昔、遠い東の町で幾人かの兵士が、／真夜中に松明を持って走り回り、／粗末な衣服を奪い合い、みじめな男の衣服のために／サイコロを転がしたと。／神の驚異と悲しみも知らずに。

このソネットの冒頭に登場するエンディミオン(=キーツ)は、ワイルドにとって美あるいは詩的なものの象徴であった。これはギリシア的な美への憧れであるのだが、それと同時にもう少し普遍的な、ワイルドにとってのいわば「美のアイデア」としてのキーツ像でもあった。そういうキーツの手紙を売り買いしようという俗っぽい行為が彼には許せなかったのである。

もちろん、ノックスのようにワイルドを揺れ動く、一貫性のない人間と見る批評家もいる。それも一面真実であろう。しかし、見方を変えればこれは憧れる対象に対する賛美と

独占欲のあらわれではないか。ワイルドにとってキーツはギリシア的な美をこの世に具現化した、偉大な詩人であると同時に、人間として愛する対象であったのかもしれない。

と同時に気づかされるのは、キーツという詩人を通してのワイルド自身の詩人としての自覚・自負である。それは7行目から8行目に現われている。ここでワイルドは「小さな病んだ眼でじっと見つめ、ほくそえむために、／詩人の心のクリスタルを砕いてしまうような奴らは。」と、「クリスタル」という単語を用いているが、これは彼の文学論と大いに関係がある言葉である。例えば、書簡の中で「詩はクリスタルのような物であるべきだ。それは人生をより美しく、より非現実的なものにしなければならない。」とワイルドは述べている。つまり彼にとって、キーツの手紙の売買はプライベートの売買であると同時に、詩的なものから「神秘性」をはぎ取ってしまう行為全般、を意味したのではないか。

さてこの詩の後半では急にトーンが変わり、キリスト教的な内容が歌われる。ここでは、その真価のわからない大衆に売られようとしているキーツの手紙と、その神聖さのわからない兵士たちが奪いあっているキリストの衣服がアナロジーとして比べられている。恐らくワイルドは自分を一種の殉教者と見ていたのであろう。そしてこのような思いは、ワイルドが自分と同一視したがついてきたキーツにも被せられている。彼はこのようにして自分と殉教者キーツ——詩的なものに殉じようとした詩人——を同一視し、自分の詩人としてのテンションを高めていこうとしたのではないだろうか。そしてこの態度は、キーツのいう「ネガティブ・ケイパビリティ」ともつながっていく。

もちろん殉教者的態度というような受身的な部分だけで、キーツとワイルドは結びついていたのではない。詩人は何よりも他ならぬ自分のために歌わねばならない。基本的な自己表現の衝動は、大なり小なり、どんな詩人にも存在するものである。

以上見てきた事から考えると、美の殉教者たる詩人としての「覚悟」と詩人としての微妙な自己表現、この2つの要素が、ワイルドとキーツを、芸術家としてばかりでなく人間として深く結びつけていった原因ではないか、という事になる。キーツを愛する事により、ワイルドの詩は大きく変わったと思われる。それは単なる「影響」という言葉では括れない、詩人と詩人の魂の交流、とでも呼ぶべきものではなかっただろうか。